

発話に伴う身ぶりの観察

ーフォリナー・トークの観点から見てー

古 本 裕 子

1 はじめに

日本語学習者と母語話者との接触場面で日本語学習者が話を理解できない場合に、母語話者が身ぶりによって問題を解決しようとする場合がある。本研究ではこれをフォリナー・トークの一種として観察する。

接触場面の母語話者の発話については、フォリナー・トーク や第2言語習得の立場から研究がされている⁽¹⁾。一方、第2言語習得研究でも、母語話者の発話の調整は、非母語話者の言語能力が自分よりも低いことを考慮してするものであり、学習者に理解可能なインプットを与えるという観点から重要であるとして、多くの研究がなされてきた (エリス 1988)。しかし、従来からなされてきたのは言語面からの研究に限られていた。

一方、母語話者が身ぶりなどの非言語情報も活用しながらコミュニケーションを行っていることは分かってきているが、接触場面で母語話者がどのように身ぶり⁽²⁾を使っているかを詳しく調べた研究はほとんど行われていない。

非母語話者が直面するのは、視覚的な情報にあふれた接触場面である場合がほとんどであり、接触場面の母語話者の身ぶりについて明らかにする研究が必要である。

2 先行研究

2.1 身ぶりの先行研究

身ぶりには次のような機能があると考えられてきた。

1 伝達機能 (コミュニケーション説) : (Kendon 1994)

発話をより明確に正確に伝える役割。

2 認知機能 (表出説) : (Rime & Schiaratura 1991)

発話の生成に伴って現れ、発話を促す。

3 詩的機能 : (川上 1995)

身ぶりすること自体を楽しむ。

(1) フォリナー・トーク は社会言語学で使われ始めたことばで、「母語話者が他言語話者 (外国語話者) に分かりやすく話そうとする時に用いる簡略化された言語使用域 (register)」(Ferguson 1981) を指す (ロング 1992)。

(2) 本研究で対象としているのは、手や体の動きを中心にした身ぶりと、頭の動き、および上体の動きを含む姿勢である。なお頭の動きの中で応諾の意味を含まない相づちとしての頭の動きは分析の対象としない。分析対象となった非言語行動を身ぶりまたは動作ということにする。

4 会話調節機能：(Ekman & Friesen 1969、Duncan 1972)

会話の流れを調整する。

研究が始まって以来身ぶりには唯一の機能があるという前提のもとに、どれがその唯一の機能なのかを巡って激しい議論がなされてきた（例えば Rime & Schiaratura 1991、Kendon 1994）。しかし川上（1995）は一つの身ぶりの機能は背反するものではなく、いろいろな機能を同時に合わせ持つことができると主張している。

本研究は、以上のような身ぶりの機能研究の流れの中にあるが、身ぶりの機能を一つに特定しようとするものではない。例えば、一つの身ぶりは、それが発話に伴ってあまり意識しないで表出されたものであっても 聞き手になんらかの意味を伝達し、それは同時に会話の流れを調整している可能性もあると考えるのである。ただ、ここでは、身ぶりのフォリナー・トークとしての機能に注目して観察していく。

2.2 フォリナー・トークの先行研究

接触場面では、非母語話者の日本語の能力が低い場合、母語話者は会話がブレイクダウンしてしまわないようになんらかの調整をしているが、これらの調整がフォリナー・トークである。そして、フォリナー・トークには、インプットを調整する方法と、相互交渉による調整があるとされる。（エリス 1988）。Long（1983）は相互交渉による調整は学習者と母語話者の会話のやり取り中で行われるもので、会話におけるトラブルを回避するストラテジー（strategies）とトラブルが起きたときにそれを解決するタクティクス（tactics）、これら二つの混種（strategies and tactics）があるとしている。

フォリナー・トークについての日本語の研究は、スクータリデス（1981）、志村（1989）、坂本ら（1990）など多くがある。これらにあげられている日本語独特のフォリナー・トークには、「です」「ます」体を使う、人称代名詞の多用、助詞を強調する、文節の終わりをはっきり言うなどの例があげられている。

このように、接触場面で行われている調整に関して言語面では様々な種類の例が観察されている。しかし、非言語行動の調整は「ジェスチャーやうなずきの数を多くする」（坂本ら 1990）と記述されているのみである。母語話者が接触場面で身ぶりを多用しているのであれば、どのような身ぶりがどのように会話の中に現れるのかを明らかにしなければ、フォリナー・トークの研究は完成しない。

3 研究の方法⁽¹⁾

被験者は、日本語母語話者が男女各3人である。接触場面では、この6人が同性の初級修了程度の日本語学習者に対しアニメーションビデオを見て、そのストーリーを語った。分析する資料は、6組である。なお、被験者はお互いに顔見知りどうしである。

⁽¹⁾ 詳しくは、古本（2001）参照。

4 分析方法

音声テープを文字化したあとで話し手の発話を分析し、次のAとBの部分に分けた。なお、ここで言う話し手とは、ストーリーを語る人のことで、すべて日本語母語話者である。聞き手とは、それを聞く人のことで、すべて日本語学習者である。

A 話し手がストーリー展開を独話的に語っている部分

B 聞き手の理解に問題が発生したときに話し手が問題を解決する部分

観察する会話ではタスクを課したため、発話はAの話し手がストーリー展開を独話的に語っている部分が大きな割合を占めている。しかし、接触場面では母語話者の発話が非母語話者に理解されない部分がかかなりあったため、母語話者はその問題をなんとか解決しなければならなくなる場面がしばしばあった。それがBの部分である。これはLong (1983) のトラブルが起きたときにそれを解決するタクティクス (tactics)、これら二つの混種 (strategies and tactics) の部分を観察していることになる。本研究では、話し手の発話はこのAとBの部分がほとんどであった。⁽¹⁾ ここでは、フォリナー・トークとしての身ぶりを観察しているため、話し手、日本語母語話者の身ぶりの観察が中心になる。

5 聞き手の理解に問題が発生したときに話し手が問題を解決する部分の身ぶり

古本(2001)では話し手の発話全体について身ぶりを観察し、接触場面と母語場面の比較をした。ここでは聞き手の理解に問題が発生したときに話し手が問題解決する部分の身ぶりの特徴を分析する。

5.1 聞き取りや理解に問題があると感じたときに聞き手がする言語行動

聞き取りや理解に問題があると感じたときに聞き手がする言語行動には次のようなものがある。

1 聞き返す (尾崎 1992、1993)

2 身ぶりや身体反応が現れる

首を横に振る・首をかしげる、相手を制止する動作をする、手や首を横に振る他ではあいつちを打つのに打たない、うなずかない、表情を変える、前に乗り出す

3 聞き流す (尾崎 1992、1993)

本研究で、聞き手の理解に問題があると判定するのは筆者である。ビデオを観察し上記1のように聞き手の理解に問題があったことが言語に現れたり、上記2のように身体的な反応があらわれた

⁽¹⁾ 話し手の発話には、このほかに、1.問題が起きているわけではないが聞き手がなんらかの働きかけをし、それに話し手が反応する部分 2.話し手が聞き手の発話が分からなくて聞き返す部分 3.語っているストーリーが終わったことを示し、聞き手に分かったかどうかを聞く部分などがあった。しかし、これらは非常に数が少なかったため、分析の対象としなかった。

りしていて、その後で問題を修復するような反応をストーリーの話し手がするような場合の発話と身ぶりを観察した。

ただし、話し手の努力によって問題が解決した場合と、解決しないままになった場合とがある。また、聞き手が理解に問題があっても聞き流しされたり、表情などが微妙で筆者にも話し手にも気づかれないものは判定ができない。また会話におけるトラブルを回避するストラテジー (strategies) (Long 1983) として話し手によって繰り返されたり、言い直しされた場合はBとはしない。

5.2 話し手が問題解決する部分の身ぶりの例

フォリナー・トークの先行研究では、意味交渉 (Long 1983) の場で、母語話者は (1) 母語話者が非母語話者の理解確認要求に対して確認を与える、(2) 母語話者が非母語話者を訂正する、(3) 自己発話を繰り返す、(4) 他者発話を繰り返す、(5) 自己発話を言い換える、(6) 他者発話を言い換える、などするとしている。また、尾崎 (1993) は、非母語話者が聞き返しをしたときにする母語話者の反応には「確認」を与えること、自己発話を繰り返す「反復」、それ以外の手段を包括した「説明」という3つの方策があるとしている。

本研究の観察によると、聞き手が聞き取りや理解に問題が起きたときの話し手の反応には発話だけでなく、身ぶりを伴っている場合がある。言語面だけを見れば同じ発話を繰り返していたとしても、身ぶりについて変化があれば、単なる繰り返しとは言えない。しかし、これまで身ぶりなどの情報は考慮されて来なかったため、問題解決部分でどのように身ぶりが現れるかを観察した例は少ない。以下に本研究で得られた例をあげる。なお例の中の発話や身ぶりの説明に太い下線があるのは、今説明している部分であること、また (0.5) などの数字はポーズの秒数を示す。

5.2.1 聞き手の聞き返しに対して確認を与える身ぶりをする場合

相手の聞き返しに対して確認を与える発話が多いのは、フォリナー・トークの特徴の一つであった。このような場合、うなずいて「はい」の意味、首を横に振って「いいえ」の意味を表す身ぶりが伴うため、これらの身ぶりも必然的に多くなる。

しかし、実際の会話を観察すると、イメージを表す身ぶりで確認を与えることがある。次の例1の聞き手は、登場人物の人数について、確認する意味で「よにん↑よ、よっつ」と指を4本立てながら、内容を聞き返している。それに対して、この話し手は②で指を4本立てて「はい、よっつ」と発話し、4人という情報に確認を与えている⁽¹⁾。この身ぶりは相手の発言を繰り返す、言葉による確認と同じような役割をしていることになる。一方、聞き手も③でもう一度指を立てながら相手の発話を確認している。

(1) この物語の主人公は擬人的に描かれたペンギンである。学習者は「4羽」という単語を知らないため「よっつ」と言い、日本語話者も無理に直さず「はい、よっつ」と答えている。

(例 1)

J : はい。いいですか。 ちょっとあぶない↑ははは (笑)

F : あー (0.6) オーケー、そう、あー、このまんがのあいだ (0.7)

J : はい。 ②はい、よっつ。

F : ①よにん↑よ、よっつ。 よっつ。よっつ。 ③よっつがあります。あ、の、ピングとお、おかあさん↑

①指を4本立てる。②指を4本立てる。③指を4本立てる。

5.2.2 自己発話を言い換えたり繰り返したりするとき前と全く同じ身ぶりを繰り返す場合

次の例2は身ぶりの「反復」の例である。聞き手に「はしりまわって」が理解されなかったために、話し手は「おいかけまわして」と言い換えたり、「はしりまわります」と繰り返したりしているが、身ぶりは②③④と円を描く身ぶりを反復している。さらに、聞き手に聞き返されて、発話を繰り返しているが、⑤のおじいさんが座っている姿を示す身ぶりと⑥の走り回っている動きを表す身ぶりも①②でした身ぶりを同様に繰り返している。

(例 2)

J : ①おじいさん が すわっている②まわりをはしりまわって ③おいかけまわして ④はしりまわります。

F : うん↑ うん↑

J : ×× ⑤おじいさんのいる⑥まわりを はしりまわって さわぐんです。

F : はしりまわり、わりまわす↑

①両手で円筒形を作る。②指で円を机上に描く。③指で円を机上に描く。④指で円を机上に描く。

⑤両手で円筒形を作る。⑥指で円を机上に描く。

5.2.3 自己発話を繰り返すとき 新たに身ぶりを付け加える場合

次の例3では「おこりました」と初めて言うときには発話のみであったが、聞き手の日本語学習に「おこりました」と聞き返されている。そこで再度「おこりました」と自己発話を繰り返すのだが、ここでは新たに身ぶりを付け加えている。身ぶりは①では、両手で握り拳を作り、それを左右の腰に当てるといふ「おこった」ときの「動き」を表す身ぶりである。さらに「おこったの」といいながら、②では今度は違う身ぶり、ちょうど外国映画で相手にそれは「だめだ」というときに指を立てて左右に振るといふ身ぶりを付け加えている。

古 本 裕 子

(例3)

J : でも、ピングとおとうとが、びょうきになったということが うそだということがわかったので、うん。おかあさんが、

F :

J : (1.4) おこりました。 ①おこりました。 ②おこったの。

F : (0.7) おくりました。 お、おこ あー (1.6) うーん (1.3) ほ、ほめほめま

J : ほめるのはんたいです。 はい。 (0.9) おわりです。

F : 。—す↑and、さが、 はい。 ほめるのはんたい。はい。

①両手で握り拳を作りそれを左右の腰に当てる。②右手で人差しゆび1本を立てそれを振る。

しかしこの例では①②も身ぶりによる情報追加の試みは成功せず、「ほめるのはんたいです」ということによって聞き手の理解を得ている。

ここでは、言葉は全く同じ言葉を反復させているにもかかわらず、伴っている身ぶりは、前と違う身ぶりをつけ加えている例を挙げた。身ぶりによって新しい情報をつけ加えていることになり、言葉だけの観察では「反復」とされるが、これは単なる「反復」ではない。発話で言えば「言い換え」に相当することが起きている。

5.2.4 発話しないで身ぶりだけする場合

次の例4は、「はずれてしまって」という言葉が学習者に分からず、自己発話を反復して説明しているものである。①②は「はずれた」という動詞は同じであるが、身ぶりを変化させて説明している。しかし成功せず、再度聞き返されている。③で話し手はついに発話しないで①とよく似た身ぶりだけするというものである。これに対し、聞き手も④で話し手の③と同じ身ぶりを無言で繰り返して、理解しようとしている。ここで注目するのは、この③や④の例は発話のみの分析では現れてこないが、身ぶりで意味の交渉が行われていることである。次に、話し手は、話を少し前にもどして説明し、再度「はずれてしまいます」と⑧リズムを刻むような動作とともに発話している。しかし⑧のリズムを刻むような動作は、意味的には新しく情報をつけ加えない。聞き手は「はずれます」の意味が最後まで理解できなかった。

(例4)

J : ……①ひものここがはずれてしまって うーん ②はずれました。

F : はずれてしまって、はずれます。

発話に伴う身ぶりの観察

J : んー③ (5.2) ⑤さいしょ ひもがかかってて⑥ピングは これでわたります。

F : What is はずれま。 ④

J: だけど、ともだち⑦こっちにいるんだけども ひもが こ⑧はずれてしまいます。

F : はは　(咳)　　　　　　　　　んん。　　　　　　　んふ。

①右手の親指と人差し指、中指の先をあわせ、ものをつまむような手をして、ある場所を指す。②一回「強調」のストローク。③右手左手とも指で、丸の形を作り、それを顔の前でチェーンのように二つ合わせ、その後左手のみ下へおろす。④（聞き手の身ぶり）話し手の③の身ぶりをそのまま繰り返す。⑤左手を少し上げる。⑥右手を弧を描くように左手下をくぐらせる。⑦場所を手で指す。⑧手を小刻みに振る。

5.2.5 理解が困難な部分を発話せず身ぶりで文の一部を補う場合

次の例 5 は、理解が困難になっている部分の発話が一部省略され、その部分を身ぶりで補っている例である。

ここでは、話し手の「雪合戦」の発話が問題となっている。この聞き手は相づちをうまくうつのだが、この部分では相づちがなく雪合戦を理解していないと推測された。話し手は雪合戦に使う雪玉をにぎるかっこうをしながら雪合戦し、はじめ英語でスノーボールと言い換えている。このとき、雪玉を投げる格好をしながら、「な、・・・なん わかりますか」と発話しているのである。この場合、「投げる」という単語は全く発話されておらず「雪合戦」も繰り返されていない。その部分を身ぶりが代わりをしている。身ぶりが「ゆきがっせんは なにかわかりますか。」の「ゆきがっせん」の部分、つまり文の一部を表していることになる。

(例 5)

J: うるさくします。おこられます。 え、しばらくは しずかに↑ あそびます。で、そのあと、

F : うん

I: またさわぎます。え、なん、なんてゆんだらう。ゆきがっせん。えっと、①スノーボール、スノーボール

F :

J: ②な、な、な、な、な、なん わかりますか。 ④で、あそんで

F: うーん ③わかった。わかった。

①雪玉をにぎるかつこうをする。②雪玉をなげる格好をする。③大きくうなずく。④投げる格好をする。

5.3 話し手が問題解決する部分の身ぶりのコミュニケーション上の効果

以上、聞き手が理解に問題があったとき、話し手がする問題解決のための身ぶりと言話の例を見てきた。単に言話を繰り返している時にも身ぶりは「言い換え」に相当するような情報を聞き手に与えている場合や、言話されないで身ぶりだけが出現する場合もあり、身ぶりの情報も無視できないことが分かった。

ただし、これらの身ぶりはいつも問題解決の役に立っているわけではない。例えば、例3の「おこります」を母語話者は腰に手を当てるという怒ったときの身ぶりをして説明しようとしたり、例4の「はずれます」では、母語話者は指で鎖の形を作ったあとで指をはずして説明しようとしているが、これらは、結局聞き手が理解することには至らず、聞き返しの連鎖を生んでいる。

身ぶりをする者は、意図している、意図していないに関わらず、言語だけの場合よりも多くの情報を発信している。しかし、身ぶりは言語のようにコード化がされている部分が少ない。そのため聞き手の方では、一度に多くの処理されていない情報が与えられることになる。そのため、単に身ぶりが示されたとしても、その動作のどの部分がなにを意味しているのかについて理解するのは難しいと考えられる。例3、例4のような状況では、腰に当てた手、指で作った鎖は他のいろいろな解釈が可能で意味を推測しにくい。身ぶりが理解の助けとならないのである。

身ぶりは、その時に伴っている言葉の意味が理解できるときは、情報を追加する効果があるだろう(古本2001)。また、日本語がわからなくても、聞き手に分かる言語に言い換えてそれと同時に身ぶりをする場合、例えば、雪合戦の意味を理解させるのに成功した例5がそれに当たる。

または身ぶりのコード化が進んでいるようなものでは、言語が不明瞭でも情報をよりはっきりと伝えることができる。例えば観察例1では、話し手の「よんひき」という言話に伴う4本指を立てるという身ぶりは、「よん」が聞き手が知っている数字の「よん」であることを理解させ、「匹」が分からなくても聞き手が「よんひき」を理解する助けとなったと思われる。同じように「ここ」「これ」「こういうふうに」というように聞き手が知っている単語を言話しながらする「位置・指示」を示す身ぶりは、接触場面では非常に使用が多いことが観察された(古本1997)。これは身ぶりが何かを指示したり例示しているということが聞き手に分かっているため、理解促進の効果を持ったと考えられる。

Krashen は、第2言語習得が「i」の段階から「i+1」の段階に移行するためには、学習者が「i+1」を含むインプットを理解することであるという「インプット仮説(input hypothesis)」を主張している(エリス 1988)。これと同じように、身ぶりを言話に付随させることが、「i+1」を含むインプットを理解させることにつながるときのみ、有効な伝達が成立するのではないだろうか。

しかし、身ぶりはコミュニケーションに全く効果がないわけではない。言話に身ぶりを付随させれば、ことば以外のもう一つのチャンネルを使うという観点から見て、より多くの情報を伝えることになる。上記にあげた理解促進に成功した例だけでなく、例えば、「強調」の動作は言話をゆっくりにし、助詞や区切りの位置を聞き手に印象づけるという点では効果があがっていると思われる(古本2001)。

上記のようなことを念頭に入れて、より有効な身ぶりはどのようなものかについては、今後研究していく必要があるだろう。

6 まとめ

本研究では、ストーリーを語る場面に現れる身ぶりを分類し、接触場面で聞き手の理解に問題があった場合に、話し手がする問題解決部分の身ぶりを観察した。

フォリナー・トークの研究では、母語話者の会話の調整は言語面からのみ検討されてきたが、接触場面で聞き手の理解に問題があった場合に、話し手が問題解決のためにする「確認」や「反復」の発話に身ぶりが伴う例として、①相手の発話に確認を与える意味で身ぶりをする場合。②発話が単に反復をしているときに身ぶりも同様に反復させる場合③発話は反復だが、身ぶりを変化させる場合④発話は繰り返さないのに身ぶりだけを繰り返している場合⑤発話の内容の一部を身ぶりで代用する場合が観察された。これらの結果から、身ぶりは言語とは別の情報を聞き手に与えていることがわかり、フォリナー・トークの一部として無視できないことが分かった。

しかしながら、身ぶりをしたことによって、聞き手の理解が促進されたというような場合は少なかった。身ぶりは言語のようにコード化がされている部分が少ないため、聞き手の方では一度に多くの処理されていない情報が与えられても、どう処理していいか分からないのである。接触場面での身ぶりは、同時に発せられる言葉の意味がよく理解できるときその身ぶりの意図がよく理解できる。また、比較的コード化された数字や場所などを示す身ぶりは、言葉の内容が不明瞭なときでも聞き手に理解可能な追加の情報を付け加えることができると言えるだろう。

本研究の観察では、身ぶりはフォリナー・トークとしては非常に有効に働くということはあまり期待できなかった。それが、一般的にも言えるのかについて、さらに観察例を増やして研究を進めなければならない。また、今後はより広範囲で自然な資料を基にし、接触場面と母語場面の本質的な違いが何であるか、どうしても聞き手に理解してもらいたい内容があるとき、もし身ぶりを使うとしたらどのように提示するのが効果的かについて研究していく必要がある。

<参考文献>

- エリス, R. (1988) 『第2言語習得の基礎』 牧野高吉 (訳)、ニューカレント・インターナショナル、123-169. Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press, Oxford, U. K.
- 尾崎明人(1992) 「『聞き返し』のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』(カッケンブッシュ寛子 他編) 名古屋大学出版会、251-263.
- 尾崎明人(1993) 「接触場面の訂正ストラテジー・『聞き返し』の発話交換をめぐって・」『日本語教育』81号、19-30.
- 川上広長(1995) 『ジェスチャーの詩的機能とコミュニケーションにおけるその位置づけについて』 京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士論文

古 本 裕 子

- 坂本正・小塚操・架谷眞知子・児崎秋江・稲葉みどり・原田智恵子(1990)「日本語のフォリナー・トークに対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69号、121-146.
- 志村明彦(1989)「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68号、204-215.
- スクータリデス, A. (1981)「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45号、53-62.
- 古本裕子(1997)「ストーリーを語る場面に出現する身ぶり ―接触場面と母語場面の違い―」日本語教育学会発表予稿集
- 古本裕子(2001)「発話に伴う身ぶりについての一考察―ストーリーを語る部分に注目して―」北陸学院短期大学紀要第33号
- ロング, D. (1992)「日本語によるコミュニケーション・日本語におけるフォリナー・トークを中心に」『日本語学』第11巻、13号、24-32.
- Duncan, S. (1974) "On the structure of speaker-auditor interaction during speaking turns." *Language in Society*, 2, 161-180.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1969) "The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding " *Simiotica*. 1, 49-98.
- Ferguson, C. A. (1981) " 'Foreigner talk' as the name of a simplified register." *International Journal of the Sociology of Language* 28, 9-18.
- Kendon, A. (1994) "Do Gestures Communicate?: A Review." *Research on Language and Social Interaction*, Vol. 27 No. 3, 175-200.
- Long, M. H. (1983) "Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input." *Applied Linguistics* 4: 126-141.
- Rime, B. & Schiaratura, L. (1991) *Gesture and Speech Fundamentals of Nonverbal Behavior*. Feldman, R. S. & Rime, B. Cambridge University Press 239-281.